いじめ被害者への有責性認知の非意識的側面を測定する IAT作成の試み その2
―妥当性の検討―

○堀 孝司（甲南大学大学院）　小山聡子（さくメンタルクリニック）
福井義一（甲南大学）

キーワード：いじめ，被害者への有責性認知，潜在連合テスト

問題と目的

「いじめられる側にも何らかの責任がある」といういじめ被害者への有責性認知（竹川，2002，2010）について，福井・小山（2015，2016，2017a-c，2018，2019）や小山・福井（2014a，b，2016a，b，2018，2019），Koyama & Fukui（2016）により実証研究が繰り返されてきた。

しかし，これらの先行研究では，いじめ被害者への有責性認知を質問紙で測定していたため，その意識的側面しか測定できていない可能性があった。そこで，堀・小山・福井（2020）は，いじめ被害者への有責性認知の非意識的側面を測定する潜在連合テスト（以下 IAT）を作成し，その内的一貫性と再検査信頼性を検討したが，その妥当性については未検討であった。そのため，本研究では，いじめ被害者への有責性認知の意識的側面やいじめを容認する態度との関連により弁別的妥当性を，向社会的サイバーボール課題（Vrijhof et al.，2016）の成績との関連により予測的妥当性を，それぞれ検討することを目的とした。IAT で測定されたいじめ被害者への有責性認知の非意識的側面は，1）意識的側面とは無相関である，2）いじめ容認態度とは無相関である，3）向社会的サイバーボール課題における被排斥者へのパス回数とは低い負の相関があるという3つの仮説を検証した。

方　法

研究協力者　クラウドソーシングで299名（男性：151名，女性148名：平均年齢40.53歳（*SD* = 9.65））の協力を得た。このデータは，福井他（2020），小山他（2020）と一部重複がある。

いじめ被害者への有責性認知 IAT　本 IAT で使用した刺激語を Table 1 に示した。PC 画面に提示された刺激語を分類するのに要した時間から D 値を算出した。この値が高いほどいじめ被害者への有責性認知の非意識的側面が強いことを示す。

Table 1　いじめ被害者への有責性認知IATの刺激語

概念語		属性語	
いじめ加害者	いじめ被害者	責任がある	責任がない
いじめっ子	いじめられっ子	責められる	許される
苦しめる人	苦しむ人	非のある	非のない
傷つけた人	傷ついた人	罪深い	無実の
迫害者	犠牲者	クロの	シロの
ジャイアン	のび太	おかしい	ふつうの

向社会的サイバーボール課題　PC 画面上で4名がボールをパスし合う課題において，参加者以外の3名のうち1名にパスが来ない排斥状況で，被排斥者に参加者がボールをパスする回数を測定した。パス回数が多いほど，いじめ場面で被害者に向社会的にふるまうことを示す。

尺度構成　いじめ被害者への有責性認知の意識的側面を測定するために，小山・福井（2014a）と同様に，いじめ被害者の責任の割合を加害者のそれとの対比で合計100%になるように回答させた。いじめを容認する態度を測定するために，いじめ容認態度尺度（神藤・齊藤，2001）を用いて，5つの下位尺度得点（いじめ軽視・いじめ撲滅行動・いじめ必要論・いじめ不可避・いじめ絶対悪）を得た。得点が高いほどいじめを容認している程度が強いことを示す。

結果と考察

いじめ被害者への有責性認知の意識的・非意識的側面と被排斥者へのパス回数，いじめ容認態度尺度の下位尺度得点の関連を検討するために相関分析を行った結果を Table 2 に示した。その結果，いじめ被害者への有責性認知の非意識的側面は，意識的側面（r =.056，*n.s.*）とパス回数（r =.010，*n.s.*）とは無相関であったのに対して，いじめ容認態度の下位尺度であるいじめ軽視（r =.114，p <.10）といじめ撲滅行動（r =.156，p <.01），いじめ絶対悪（r =.193，p <.01）の得点との間に，有意傾向または有意な低い正の相関を示した。

Table 2　各尺度得点間の相関分析結果

	非意識的	意識的側面	いじめ軽視	いじめ撲滅行動	いじめ必要論	いじめ不可避	いじめ絶対悪
意識的側面	.056	—					
いじめ軽視	.114 +	.389 **	—				
いじめ撲滅行動	.156 **	.145 *	.251 **	—			
いじめ必要論	.051	.228 **	.314 **	.113 +	—		
いじめ不可避	.083	.089	.152 **	.277 **	.348 **	—	
いじめ絶対悪	.193 **	.248 **	.420 **	.306 **	.279 **	.314 **	—
パス回数	.010	-.115 *	.003	.004	-.089	-.030	-.036

** p < .01，* p < .05，+ p < .10

本研究の結果，仮説1）は支持されたが，2）と3）は支持されなかった。IAT で測定されたいじめ被害者への有責性認知の非意識的側面は，意識的側面とは関連がないにもかかわらず，非意識的な行動指標である被排斥者へのパス回数とではなく，質問紙で意識的に測定されたいじめ容認態度の一部と関連していた。二重分離説（Perugini，et al.，2010）に基づくと，いじめ被害者への有責性認知の非意識的側面がパス回数を予測できなかったのは，参加者が半ば意識的に被排斥者にパスをすべきか否かを判断していたせいであると思われる。いじめ被害者への有責性認知の非意識的側面を測定する IAT の妥当性の検討に課題が残ったため，適切な検討方法の再考が必要である。